

## <前回：拝一神教とその純化>

### (1) 一神教と多神教

1. 古代イスラエルの宗教は、他民族・他部族がそれぞれの神々を信じていることを前提にして、自らの神(ヤハウェ)への信仰を語っていた。

2. 拝一神教：多神教的宗教文化を背景に、そのうちの特定の神への信仰を告白する宗教。  
唯一神教(monotheism)／拝一神教(monolatry)／多神教

・「一神教と多神教」は17世紀に一般的な英語になった。(Oxford English Dictionary)

Henry More(1614-1687)による使用が初出。

・宗教という上位概念(類)に属する諸類型。

この言語使用の背後にある問題意識：近代ヨーロッパ諸国の世界進出による世界各地の宗教の知識の蓄積 → 世界諸宗教の中のキリスト教という歴史理解

「一神教と多神教」とは近代ヨーロッパ的な宗教理解である。まさにヨーロッパ的。

3. 多神教も拝一神教的であり得る。あるいは、その方が自然か？

多神教の最高神は、しばしば一神教的な帰依を要求する(ジャン・ボテロ『最古の宗教——古代メソポタミア』。包括的一神教、プラトン)。

日本の神道の場合、神社と氏子の関係。ヒンドゥー教。

4. 宇宙・世界観(理論的観念的な包括性)と信仰(個別的で具体的・限定的)

→ 哲学的一神教、古代ギリシャ哲学(エレア派、新プラトニズム)

5. 山我哲雄『一神教の起源』

「古代イスラエル人やユダヤ人の間に「一神教」という概念があったわけではない。「一神教」や「多神教」は、近代以降の宗教学における宗教類型論上の概念であり、いわばその術語である。」(22)

「申命記の神観は、前八世紀の文書預言者たちの多くの場合と同様、拝一神教的であったと見るべきである。」(267)

「旧約聖書において、ヤハウェのみを唯一の神とし、他の神々の存在を原理的に否定する唯一神教的な神観が最も集中的に見られるのは、イザヤ書四三-四六章である。」(340)

「第二イザヤで目立つの、偶像礼拝に対する厳しく執拗な批判である。」(350)

「アメリカの旧約聖書学者マーク・S・スミスの、「捕囚の脅威という未曾有得の状況の中で、唯一神観は、新しい宗教の段階というよりも、レトリックの新しい段階をなしているのである」という言葉には同意できよう。」(355)

「第二イザヤ」「旧約聖書の信仰には、拝一神教的な民俗宗教の枠を超えて、普遍的な世界宗教へと発展する可能性が開けたのである。」(355)

「一連の「革命」による唯一神教の成立」(361)

「キリスト教は、ユダヤ教から唯一神の観念を受け継いだ。」(368)

「キリスト教にとって、キリストの神性を容認しながら、いかにして神の唯一性を維持するかが神学的課題となった。」(369)

### (2) 古代イスラエル宗教と一神教

6. 元来の古代イスラエル宗教は拝一神教的である。

古代イスラエルの宗教は、他民族・他部族がそれぞれの神々を信じていることを前提にして、自らの神(ヤハウェ)への信仰を語っていた。

7. 出エジプト記：モーセの十戒(モーセ的一神教)

理論的な神の一性ではなく、人間との相関性における一性の主張である。

### (3) ユダヤ教と唯一神教

古代イスラエルの歴史において、王国の分裂からバビロン捕囚(AD.597/587/583)へ至る過程は、民族滅亡のプロセスであった。古代イスラエル宗教は、この歴史的現実に対して、それを神に対する民族の背き・反逆と、民族に対する神の罰として解釈し、その上で、民族の再生(神に帰ることによって民族を再建する)を展望しようとした。

これは、古代イスラエルの宗教の純化という仕方で行われ、ここに、ユダヤ教は成立す

る。ユダヤ教的な唯一神教。民族の危機は、しばしば民族的伝統の純化を求める。

8. バビロン捕囚から帰還した者たちを中心に宗教と民族の再建を試みる。

ネヘミヤ・エズラの改革、宗教改革

9. ヤハウエの唯一性の主張：イザヤ書における「神の唯一的な普遍性」

#### (4) 一神教は排他的か？

列王記下 5：1～19

10. 拝一神教としての古代イスラエル宗教は、必ずしも極端に排他的なわけではない。これは、後の一神教にも妥当する。

排他性が際立つのは一定の条件下である。たとえば、戦争などの政治的民族的な対立状況。聖書の一神教（唯一あるいは拝一に限らず）と偶像禁止とは、緊密に結びついている。

11. 「神を神とするという要請」と「神を造り出そうとする人間」

・欲望の正当化あるいは具体化としての偶像

人間は欲望を投影して神を生み出し、その神に支配される（王権の論理）。

・本来、偶像禁止とは、人間の自己解放を意味していた。→ 偶像破壊の歴史、その情熱。

12. 宗教にとって「像」とは何か。

像はいつ偶像になるのか。相対的なものの絶対化。あらゆるものは偶像となり得る。

13. キリスト教の唯一教的神観は、古代哲学の一神教（ギリシャのエレア派、新プラトン主義、インドのウパニシャド哲学など。「一者」が唯一の真実在と見なされ、他のものはすべてその現れとする）との結合において理論的に強化された。

#### 「13. 旧約聖書において死とは何か」（省略）

### 14. メシア思想

#### (1) 旧約聖書におけるメシア思想の二源泉

ヘブライ語の原語をギリシャ語に音訳した *Messias*、意識した *Christos*。元来、「油注がれた者」「受膏者」を意味し、そこから「救世主」を指すようになった。（関根清三「メシア」、『岩波キリスト教辞典』所収）

1. 王権思想

2. 民族の救世主

この二つの源泉は、預言者においては重なり合う。ダビデの家系よりメシアは生まれるとの預言。

#### <サムエル記下>

2:3 ダビデは彼に従っていた兵をその家族と共に連れて上った。こうして彼らはヘブロンの町々に住んだ。4 ユダの人々はそこに来て、ダビデに油を注ぎ、ユダの家の王とした。ギレアドのヤベシュの人々がサウルを葬ったと知らされたとき、5 ダビデはギレアドのヤベシュの人々に使者を送ってこう言わせた。「あなたがたが主に祝福されますように。あなたがたは主君サウルに忠実を尽くし、彼を葬りました。6 今、主があなたがたに慈しみとまことを尽くしてくださいますように。わたしも、そうしたあなたがたの働きに報いたいと思います。7 力を奮い起こし、勇敢な者となってください。あなたがたの主君サウルは亡くなられましたが、ユダの家はこのわたしに油を注いで自分たちの王としました。」

#### <ヨハネ福音書>

1:40 ヨハネの言葉を聞いて、イエスに従った二人のうちの一は、シモン・ペトロの兄弟アンデレであった。41 彼は、まず自分の兄弟シモンに会って、「わたしたちはメシア——『油を注がれた者』という意味——に出会った」と言った。42 そして、シモンをイエスのところに連れて行った。イエスは彼を見つめて、「あなたはヨハネの子シモンであるが、ケファ——『岩』という意味——と呼ぶことにする」と言われた。

3. メシア預言に関する一般的な理解：メシアの語は使われないが救世主の将来的到来を待望するものも含む。

- ・理想化された王ダビデの子孫
- ・アダムに与えられた楽園の祝福を回復する者
- ・「苦難の僕」  
民族的な救世主の普遍化。

#### <メシア預言>

・「5:1 エフラタのベツレヘムよ／お前はユダの氏族の中でいと小さき者。お前の中から、わたしのために／イスラエルを治める者が出る。彼の出生は古く、永遠の昔にさかのぼる。2 まことに、主は彼らを捨ておかれる／産婦が子を産むときまで。そのとき、彼の兄弟の残りの者は／イスラエルの子らのもとに帰って来る。3 彼は立って、群れを養う／主の力、神である主の御名の威厳をもって。彼らは安らかに住まう。今や、彼は大いなる者となり／その力が地の果てに及ぶからだ。4 彼こそ、まさしく平和である。アッシリアが我々の国を襲い／我々の城郭を踏みじろうとしても／我々は彼らに立ち向かい／七人の牧者、八人の君主を立てる。」(ミカ)

・「63:1 「エドムから来るのは誰か。ボツラから赤い衣をまとって来るのは。その装いは威光に輝き／勢い余って身を倒しているのは。」「わたしは勝利を告げ／大いなる救いをもたらすもの。」2 「なぜ、あなたの装いは赤く染まり／衣は酒ぶねを踏む者のようなか。」3 「わたしはただひとりで酒ぶねを踏んだ。諸国の民はだれひとりわたしに伴わなかった。わたしは怒りをもって彼らを踏みつけ／憤りをもって彼らを踏み砕いた。それゆえ、わたしの衣は血を浴び／わたしは着物を汚した。」4 わたしが心に定めた報復の日／わたしの贖いの年が来たので 5 わたしは見回したが、助ける者はなく／驚くほど、支える者はいなかった。わたしの救いはわたしの腕により／わたしを支えたのはわたしの憤りだ。6 わたしは怒りをもって諸国の民を踏みじり／わたしの憤りをもって彼らを酔わせ／彼らの血を大地に流れさせた。」(イザヤ)、再臨預言

・「9:9 娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者／高ぶることなく、ろばに乗って来る／雌ろばの子であるろばに乗って。10 わたしはエフライムから戦車を／エルサレムから軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれ／諸国の民に平和が告げられる。彼の支配は海から海へ／大河から地の果てにまで及ぶ。」(ゼカリヤ)

・「110:1 【ダビデの詩。賛歌。】わが主に賜った主の御言葉。「わたしの右の座に就くがよい。わたしはあなたの敵をあなたの足台としよう。」2 主はあなたの力ある杖をシオンから伸ばされる。敵のただ中で支配せよ。3 あなたの民は進んであなたを迎える／聖なる方の輝きを帯びてあなたの力が現れ／曙の胎から若さの露があなたに降るとき。4 主は誓い、思い返されることはない。「わたしの言葉に従って／あなたはとこしえの祭司／メルキゼデク(わたしの正しい王)。」5 主はあなたの右に立ち／怒りの日に諸王を撃たれる。6 主は諸国を裁き、頭となる者を撃ち／広大な地をしかばねで覆われる。7 彼はその道にあつて、大河から水を飲み／頭を高く上げる。」(詩編)

#### 4. 黙示文学における「人の子」あるいは「人の子のような者」

「7:13 夜の幻をなお見ていると、／見よ、「人の子」のような者が天の雲に乗り／「日の老いたる者」の前に来て、そのもとに進み 14 権威、威光、王権を受けた。諸国、諸族、諸言語の民は皆、彼に仕え／彼の支配はとこしえに続き／その統治は滅びることがない。」

「8:15 わたしダニエルは、この幻を見ながら、意味を知りたいと願っていた。その時、見よ、わたしに向かって勇士のような姿が現れた。16 すると、ウライ川から人の声がしてこう言った。「ガブリエル、幻をこの人に説明せよ。」17 彼がわたしの立っている所に近づいて来たので、わたしは恐れてひれ伏した。彼はわたしに言った。「人の子よ、この

幻は終わりの時に関するものだという事を悟りなさい。」

「10:16 すると見よ、人の子のような姿の者がわたしの唇に触れたので、わたしは口を開き、前に立つその姿に話しかけた。「主よ、この幻のためにわたしは大層苦しみ、力を失いました。17 どうして主の僕であるわたしのような者が、主のようなお方と話すことなどできましようか。力ほうせ、息も止まらなばかりです。」18 人のようなその姿は、再びわたしに触れて力づけてくれた。19 彼は言った。「恐れることはない。愛されている者よ。平和を取り戻し、しっかりしなさい。」こう言われて、わたしは力を取り戻し、こう答えた。「主よ、お話してください。わたしは力が出てきました。」20 彼は言った。「なぜお前のところに来たか、分かったであろう。今、わたしはペルシアの天使長と闘うために帰る。わたしが去るとすぐギリシアの天使長が現れるであろう。21 しかし、真理の書に記されていることをお前に教えよう。お前たちの天使長ミカエルのほかに、これらに対してわたしを助ける者はないのだ。」

#### 5. 「人の子」をめぐる最近の聖書学の動向

「ますます多くの研究者たちがもはや「来たるべき人の子」についての発言が真性のものと考えなくなっている。」(M・J・ボーグ『イエス・ルネサンス——現代アメリカのイエス研究』教文館、107)

「最近ではバルナバス・サンダース」「人の子」は一世紀初期のユダヤ教において超自然的な、ないしは世界の終末時に現れる人物を示す名称ではなかったという意見の一致がますます増えてきている。」(108)

「ゲザ・ウェルメシュは、言語学的な根拠に基づいて、アラム語の「人の子」という語句はキリスト教以前の称号的用法がないだけでない、それはごく普通の慣用句であったから、イエスの聴衆たちは特別な意味、ないしは称号的な意味を持ったものとして聞いたはずはない、と説得力をもって主張した。」(109)

「ダグラス・ヘア」「彼の主要な結論は重要である。「人の子」という句は、福音書において含意的意味を持たず、指示的な意味しか持たないということである。」(170)

### (2) メシアの問い(宗教的問い)の普遍性

#### 6. 植村正久『真理一斑』

芦名定道『近代日本とキリスト教思想の可能性——二つの地平が交わるころにて』三恵社。

「しかし、以上の点を考慮しつつも、植村の議論には、今後の日本におけるキリスト教思想の形成にとって、参照すべき点を指摘することができる。それは、すでに論じたキリスト論と進化論との関連で提出された、「宗教的問いに対する答えとしてのキリスト教」という議論である。『真理一斑』において、議論が、人間は本来宗教的な存在であるとの主張から開始され、聖書のキリスト像へと進められたことは、すでに確認した通りであるが、これは、キリスト論的に、「問いと答え」の関係性において捉え直すことができる——詳細は本書前章を参照——。

「天下の人ことごとく一つの理想を慕いまた一つのキリストを設けざるは無し。偶像を拝し、或いは特殊なる思想に心酔してこれを楽しみ慕いて、一生を送るがごときは皆キリストを求むるより起これり」、「吾人は彼の偶像教のうちにも、キリスト降世を預期するもののあるを見るべし」(165)、「ここにもキリストかしこにもキリストと言うものあるは、キリストの需求実には人性の需求なるを知るべし。しかれども人性の需求は必ず応驗を有するものなり」、「キリストを求むるの念は自然に備わり排除するを得ず」、「キリストは万国民の渴望するところなり。」(166)

宗教的問いが人間存在に固有のものであるということは、救済あるいは救い主(メシア、

キリスト)への期待と渴望が人類に普遍的に備わっているということであり、それはキリストの問いの普遍性と解することができる。したがって、偶像崇拝を含めて、歴史的な諸宗教はすべて、人間における救済の問いに基づくという点で、キリストの問いに関係づけられるべきものなのである。キリスト教は、この人類が待望してきたキリストがナザレのイエスとして現れたことを信じる宗教であり、人類普遍の宗教的問いに対して、イエス・キリストという答えを指し示す宗教に他ならない。『真理一斑』第八章の「イエス・キリストを論ず」における聖書のキリスト像についての論述が示すように、植村は、キリスト教が信仰するイエス・キリストという答えが有する普遍的意義と卓越性を強く主張しており、まさにこの点においてキリスト教の弁証の最終目標が端的に表明されている。また、宗教の神学において用いられる類型で言えば、『真理一斑』における植村の立場は、包括主義と評することができるであろう。<sup>(28)</sup>

さらにこの点で興味深いのは、植村は以上のキリスト待望とイエス・キリストという問いと答えの関わりを、進化論——キリスト教的には救済史——と関連づけている点である。

「進歩の順序は常に特選の一個人より始めるものなり」、「宇宙の傾向は、或る最も特殊にして善尽くして、美尽くしたる形状を出すに在りと断定せざるべからず」(168)、「万物は皆キリストを待ちて、その出現の預言をなせりと云わざるを得ず。キリストは万物の依って立つところ天地の帰向する所、人世の歴史ついにキリストの一身をもって集中となす、万物皆その国の隆盛を翼賛し、古今人の経営する所、ことごとくその榮に帰せんとす。」(169)

以上の「問いと答え」の関係論から見たときに、キリスト教と日本的伝統との関わりはどのように論じることが可能であろうか。日本におけるキリスト教の弁証を、日本の宗教的伝統との関係で積極的に遂行しようとする場合、「問いと答え」の内容を具体的にどのように展開するかが問題になる。もちろん、これについては様々な可能性が考えられるが、筆者としては、祖先崇拝を核とする家の宗教という観点から、日本の宗教状況に内在する問いを解明することが重要であると考えている。日本における伝統的な家・家族構造——これはほかの東アジア諸地域との共通のものであるが——は、近代化以降、とくに近年において、急激な変動を示している(家・家族の危機)。それと共に、この家を基盤とした日本の伝統的な宗教も大きな変化に直面し、ここに現代日本における宗教的問いが具体的に現れていると言える——本書第三章および第四章を参照——。このような近代以降の歴史的な文脈において、キリスト教の弁証を遂行しようとするならば、家・家族という視点から日本の宗教的問いを分析することは不可欠の作業であり、そこから始めて、この問いへの答えとしてのキリスト教的な家・家族理解の提示も可能になるのである。これは、生命の連続性に理解に基づく家・家族概念の変革と宗教的多元性の下での新しい日本の精神性の構築という文脈におけるキリスト教思想の具体化となるであろう。植村のキリスト教の弁証論はこうした点に踏み込むものではないが、『真理一斑』に示された議論の批判的展開は、こうした思想形成を可能にするものと思われる。」

## 7. ティリッヒ『組織神学』

「人間存在の分析」(基礎的人間学)により、人間存在に内在する問いを取り出す作業(宗教哲学)。

救いの問いとは何か。そこから、思想史と神学へ議論を展開する。

- ・有限性、とくに死
- ・罪責性、とくに罪
- ・無意味性、とくに絶望